

高知市でホームレスを支援しているNPO法人「こうちネットホップ」(代表＝田中きよむ高知県立大学教授)が今年、結成15年を迎えた。路上生活者に物資を渡す「夜回り」と一時宿泊施設の提供で多くを支えてきた有志の組織。メンバーの高齢化も進む中、届きにくい声にも寄り添おうと懸命の活動を続ける。

こうちネットホップ 届かぬ声に寄り添う



路上生活者を訪ねる、こうちネットホップ代表の田中きよむさん(高知市内)

ホームレス支援15年

大学教員や学生、市議ら10人ほどで2010年9月に結成。今は月1回、繁華街を回って路上生活者に食料やカイロなどを渡し、体調が悪い人を無料低額診療所につなぐ。ほかに、不動産業者らと連携して住宅を紹介し、生活保護の受給申請にも同行する。

22年1月には一時宿泊施設「ステップハウス」を開設。アパートの2部屋(各15平方メートル)を浄財などで改装し、貧困やドメスティックバイオレンス(DV)で行き場を失った人を受け入れている。

「ここに来るまで『今日はどうしよう』『今日はなんとか生きられたい』と毎日思っていました。ハウスに身を寄せる元ホームレスの40代女性が言う。

数年前に体調を崩し、長時間働

けなくなった。アルバイトをして路上やネットカフェで生活。昼間はカラオケ店で休み、夜通し歩くことも。夜の河川敷で酒に酔った男性2人に絡まれ、肩に手を回された。路上生活が怖くなり、ネットホップを頼った。

「今は足を伸ばして寝られ、お風呂で白髪を染めることもできた。久しぶりにテレビでニュースを見た。今日や明日ではなく、もっと先のことを考える余裕ができた」

これまでに約40人がハウスを利用。疲れた心と体を休め、生活を立て直す。

「寒くなりましたね。お体、大丈夫ですか？」

11月中旬、夜回りに出た代表の田中さん(63)が公園でベンチに座る男性に声をかけていた。メンバーの手作り弁当とカイロを手渡し、「必要な物はないですか」「寝袋だけで大丈夫ですか」。男性は「大丈夫」と繰り返した。

男性は60代で、路上生活を10年以上続ける。食料は受け取ってくれるが、生活保護を勧めても「まだ大丈夫」と断られている。

「恥ずかしさや家族に連絡されたくないという理由で、生活保護を受けない人は多い。無理に勧められないが、年を取って体調を崩

すことが心配。困った時に頼ってもらえるようにしたい」と田中さんは言う。

ともに夜回り続ける副代表の下元博司さん(75)は「路上生活者は減った」と感じる。約20年前には30人ほどいたが、近年の夜回りでは会ったのは数人という。

ただ、家を失った人が減ったとは言えない。ハウスに連絡をくれるのは夜回りで出会わなかった人たち。路上生活ではなく、ネットカフェや知人宅を転々とする人もいる。「ホームレスっておるの?」と言う人もいるが、目立たないだけで存在している。支援を続ける必要がある」

貧困問題に終わりが見えない中、メンバーは15歳、年をとった。最盛期に30人ほどいたメンバーは15人になり、夜回りの範囲を市中心部に縮小せざるを得なくなった。手弁当の慈善活動のため専任スタッフはおらず、生活保護申請に同行した経験のあるメンバーは数人しかいない。

田中さんは「県外では有給職員を雇い、志のある若い人が仕事として専門性を伸ばす団体もある。活動を続ける態勢をつくり、担い手を育てたい」。年内最後の夜回りは18日に予定している。

(二瓶満瑠)